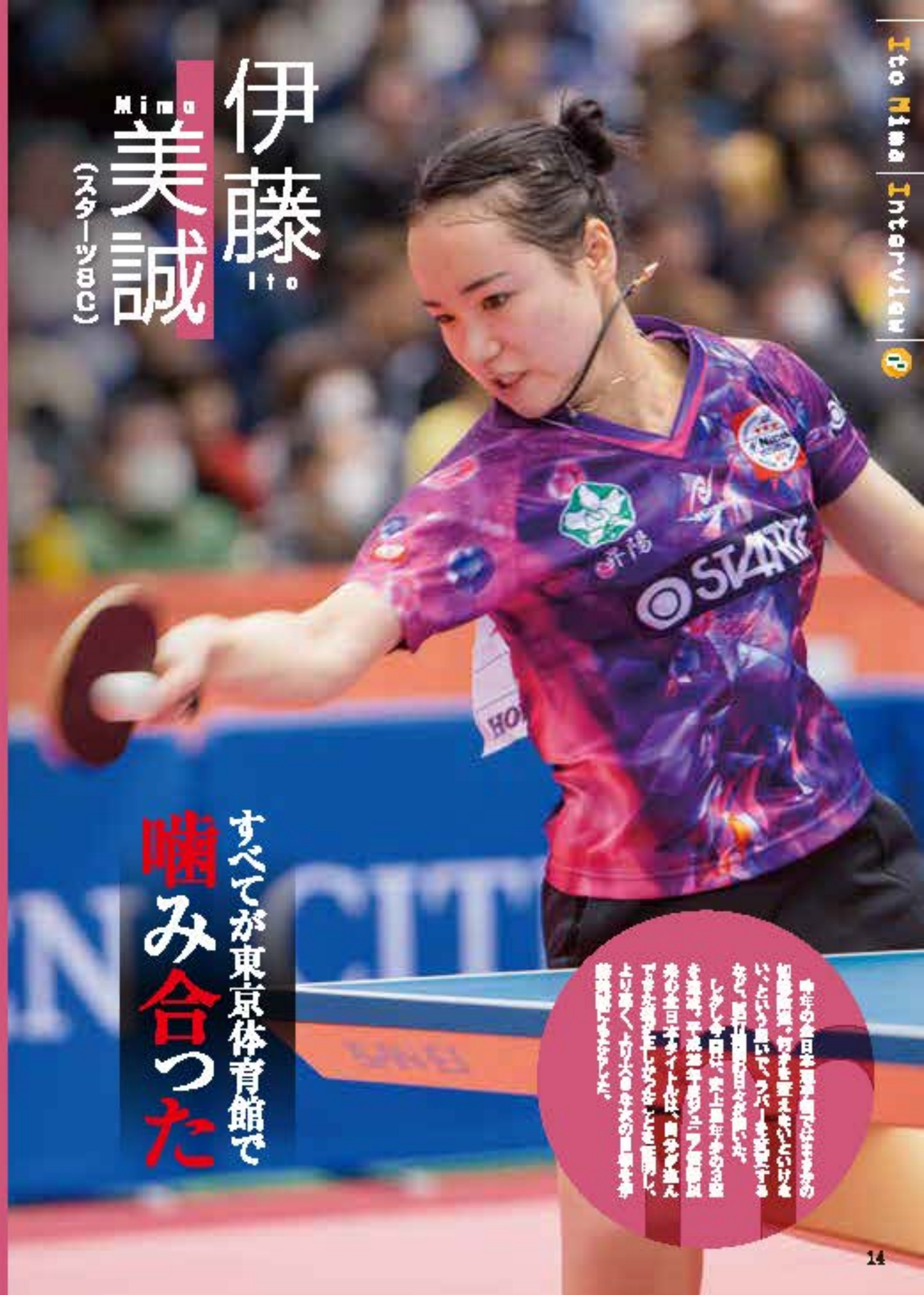
伊藤 Ito 美誠 Mima

（スターツSC）



すべてが東京体育館で噛み合った

打ってよし、守ってよし、フォアに振られれば、ゆえにならないかという形との対戦で、平成生まれ女子日本選手初の大会の最後のプレーは、前陣で構えた上台湾出身の帰化選手・陳夢の強烈なバックドライブだった。

「最後は勝ちたい、という気持ちが強すぎて空回りしていたかもしれません。ベンチで下がって、今年はまだ1勝もないまま、そして1年後の東京で2回目の試合を会場でプレーしました。その舞台裏は思うと思います」と伊藤は試合後、悔しさを噛みしめた。

苦しい練習に耐えたい

女子卓球、そして東京の舞台、史上最年少の金メダリストの誕生を期待する声は大きかった。

2016年リオ五輪でメダルを獲得した後、世界選手権やW杯、全日本選手権と、国内外の大会で結果を残し続けてきた。

「リオのスタイルを変えるのにすごく時間がかかりました。何も変えないと自分を変えられない、さまざまなプレースタイルを中国人プレーヤーと戦うためにしました」

伊藤はサウスポーで、異次元のドライブとテンション系バックハンドを武器に、ラリーの中でも相手のボールがきやすく、自分のやりたいプレーができる、というスタイルを築いてきた。しかし、東京オリンピックの代表選考レースが始まった2019年、伊藤は苦しんでいた。

「北京五輪で金メダルを獲った福原愛さんのように、日本代表としてエースとして、チームを引っ張っていかないといけない、という思いで、プレーを変えてしまった。レシーブ1本目、史上最年少の金メダリスト、東京オリンピック代表の全日本ナイトは、自分らしさを失ってしまったことで、より苦しくなり、1人の日本人選手として戦うことにもなりました。

もっと楽しんでくれると思います。ここが勝負だと思って、一生懸命やってそういう姿だと思います」

大会で良い成績を出すと、少し休憩するタイミングが、と伊藤コーチは話していたが、レギュラー1回の1ヶ月後の東京オリンピックに向けて、伊藤は休むことなく、練習を積んでいく。

この2年間は、東京での金メダル五輪代表争いが激化、「勝ち」を考えた上で、世界選手権の団体戦メンバーにも大きく左右される展開となった。

今回の世界選手権は、伊藤、メンバーが決まっていた、伊藤自身、最大の目標の団体戦、組合せでの優勝が今回の最大のだろう、と話す。

「テレビで『ゾーン状態』である、と表現されていることも多いですし、それくらい日本選手の実力は向上していますし、実際に今日、明日、と勝ち上がっていくと、ライバルがいるからこその自分がいる

12年末、伊藤が行われた世界選手権ハルムスタッド大会団体戦で、伊藤は日本代表に初選出された。

「同年代で東京五輪を目指す選手がいる中で、日本代表に選ばれたことは、とても嬉しかったです。

卓球という競技は、世界ランキングにも大きく左右されるため、